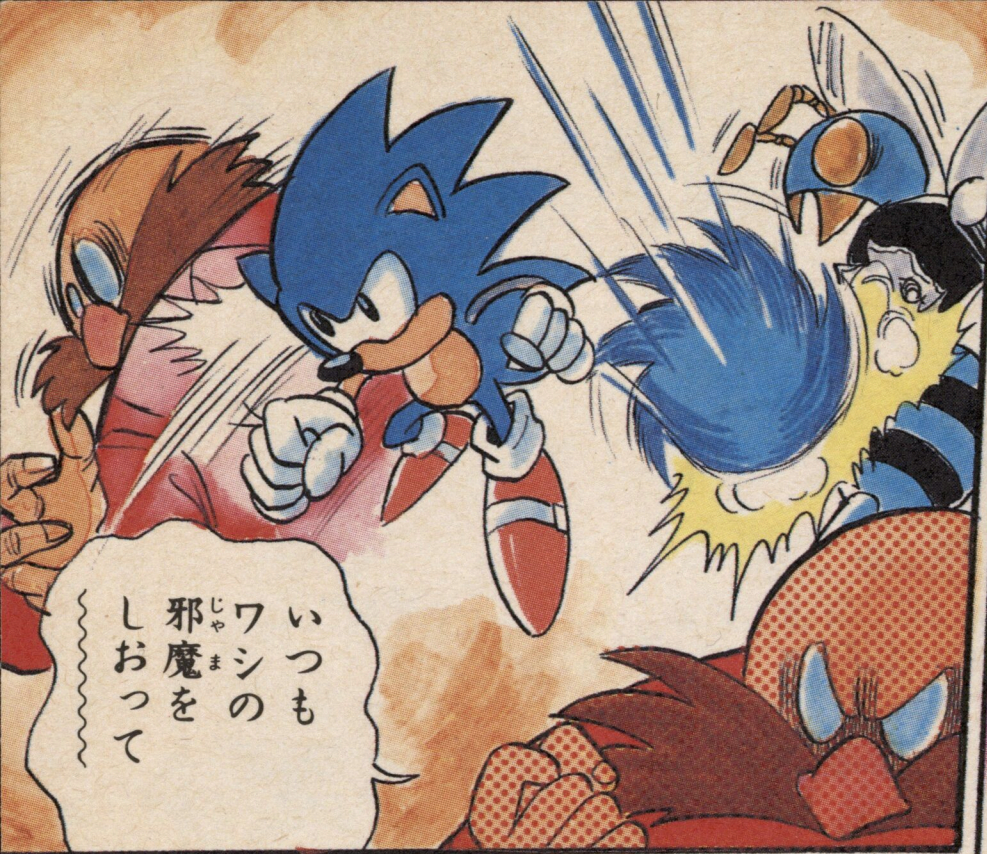
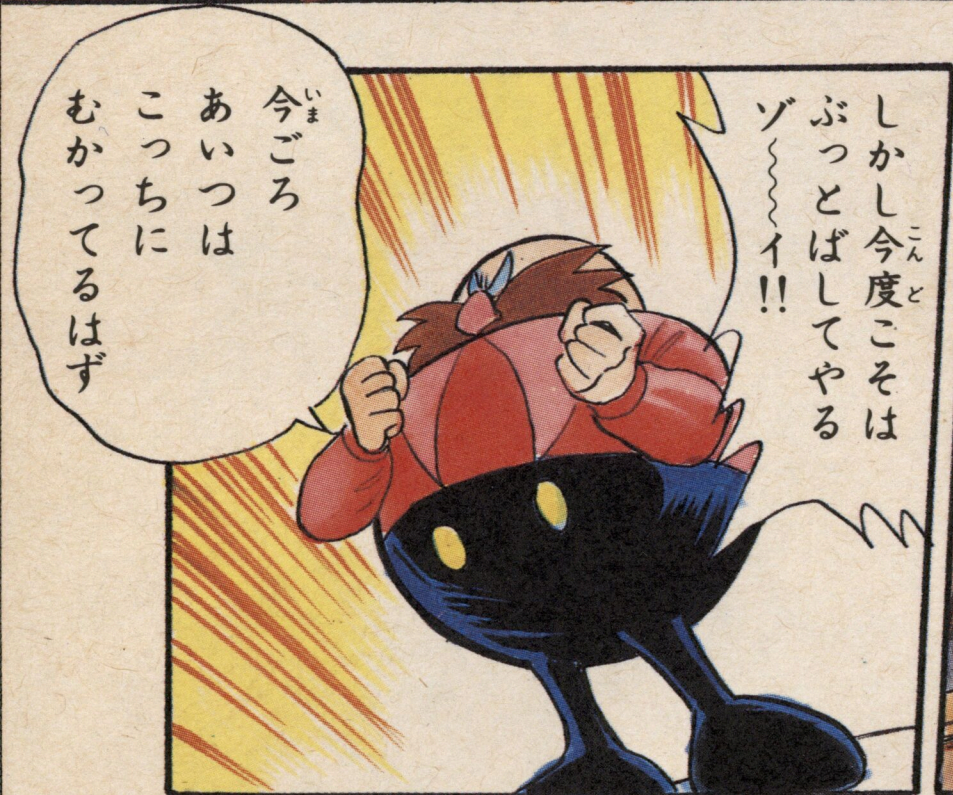
HIS NAME IS SONIC.
SONIC
THE HEDGEHOG
ソニック・ザ・ヘッジホッグ
SONIC THE
ストーリーコミックVol.3

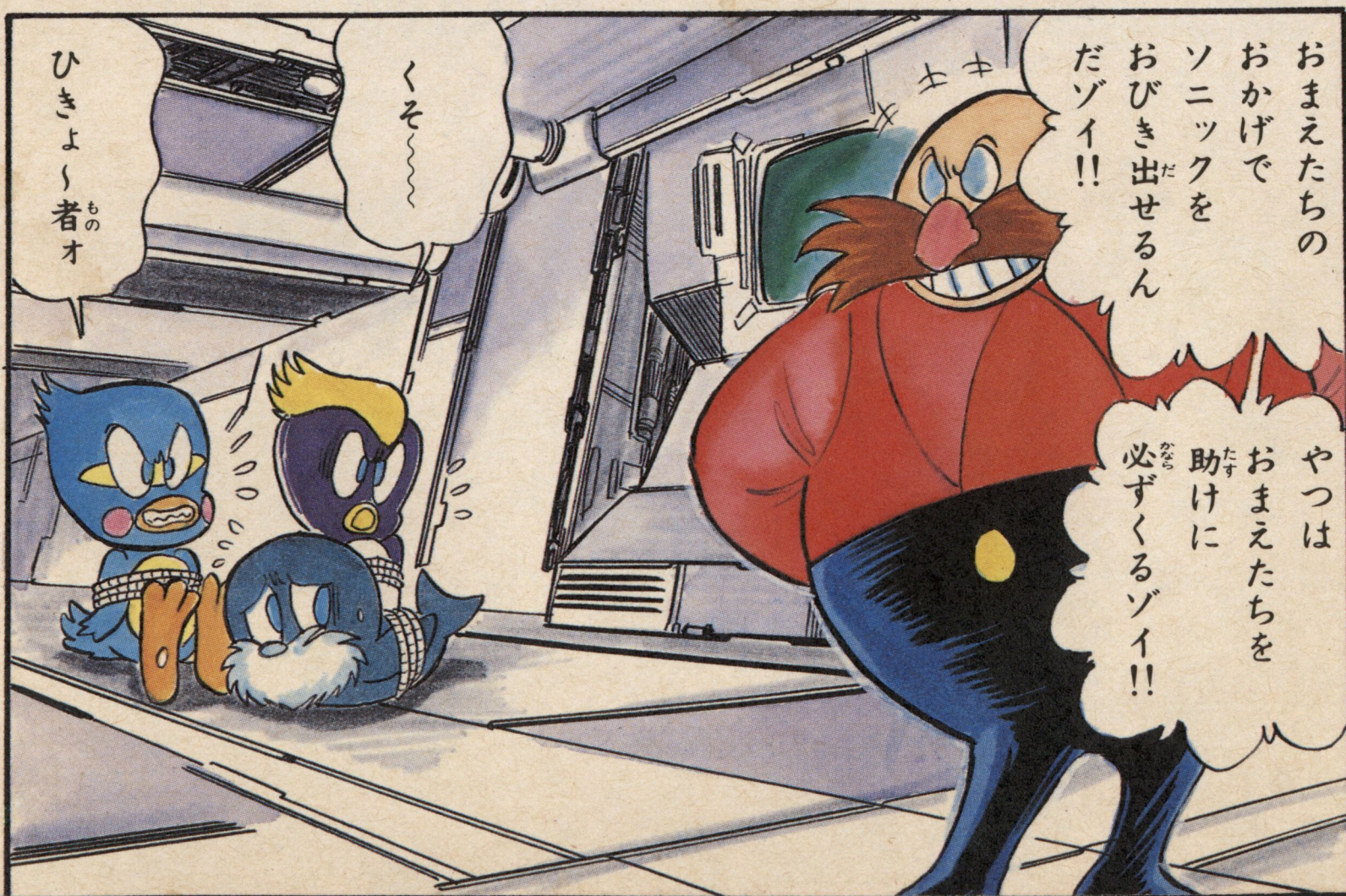
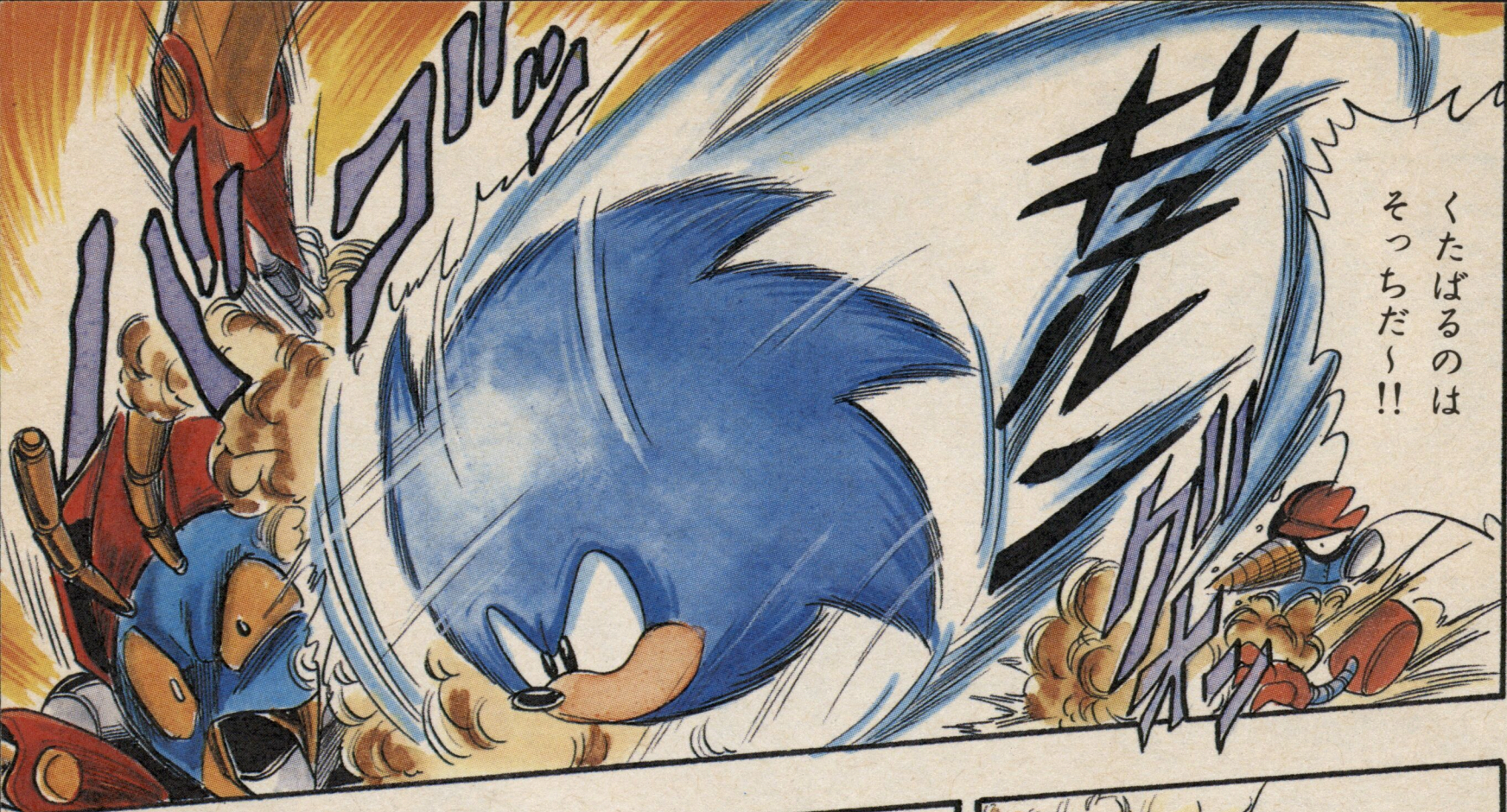
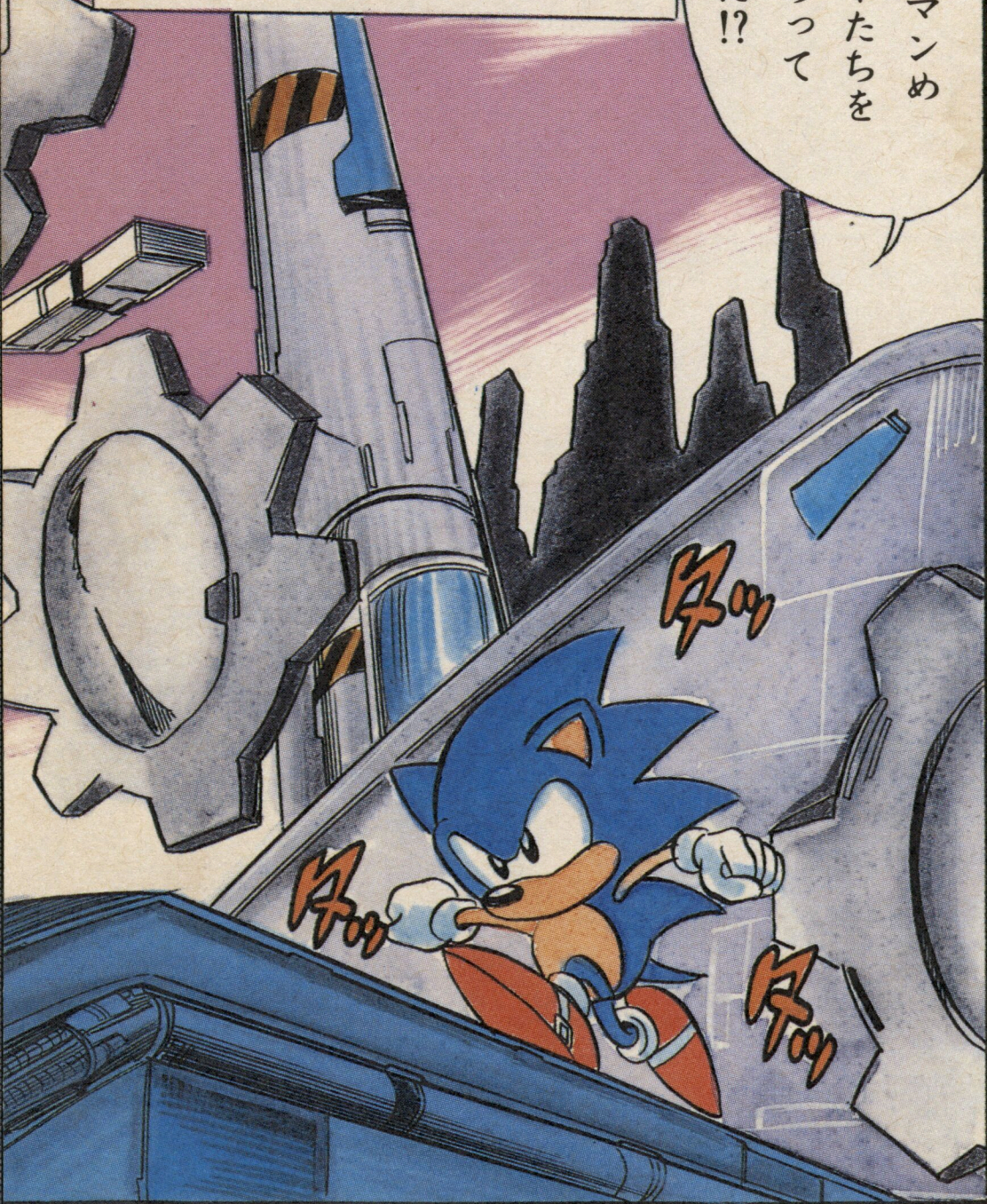
ソニック・ザ・ヘッジホッグ

ストーリーコミックVol.3

このストーリーコミックも今回が最終回。
もうゲームを買ってかなり先のステージまで行った人もいる
だろうね。ちょうど今回のストーリーが参考になれば…
さて、最終回ということで、後半にはソニックの誕生秘話を
こっそり教えてしまうゾ。お楽しみに!

オイラの名は、もうご存じ「ソニック」だ。超音速で走りまわることができるんだゼイ。島の動物たちはオイラのコンサートを楽しみにしてくれていたのに、あのにっくきDr.・エッグマンがだいなしにしてしまったんだ。コンサートをジャマしただけでなく、この緑あふれる楽園の島を、金もうけのために奪い取ろうとしているんだ。動物たちはロボットの中に閉じ込められ、オイラの助けを待っている。ワナが待ち受けようと、オイラの超音速パワーで悪者どもをやっつけてやるゾ!

いつもワシの邪魔をしおって〜〜〜

おのれソニックめ!!

しかし今度こそはぶっとばしてやるゾ〜〜〜イ!!

今ごろあいつはこっちにむかってるはず

どぃっほっほっほっほ！
しかし
ここに着いた時が
ソニックの最期
ゾ〜〜イ♡
ソニック大爆進!!
グォオオオオン
ソニック
くたばれィ

クロックワーク
ゾーン

Dr エッグマンめ
フリッキーたちを
どこにさらって
いったんだ!?

タッ
タッ
タッ

あ〜ッ
行き止まりか!?

う〜ん
まいったなァ
ん!?

ゴゴゴ
あれだ!!

ギュルーン
スポッ
なるほど
秘密の通路だったのか!?
ゴゴゴ

ぎゃははは
ワナにかかった
ゾ〜〜〜イ!!
なに!?

スポーン
わ〜〜〜ッ

ドスン

いって〜ッ

落ちるワナがやたら多いなあ

バシャァ

へ!?
水〜!?

どどどど

ラビリンス
ゾーン

ひゃーッ

ドドドドドド

どっぽん

ひ〜ッ

!?
ソニック
覚悟～～～!!

やべえ
水の中じゃ
ローリング
アタックが
できね～
ガシン
ガシン

ザパッ

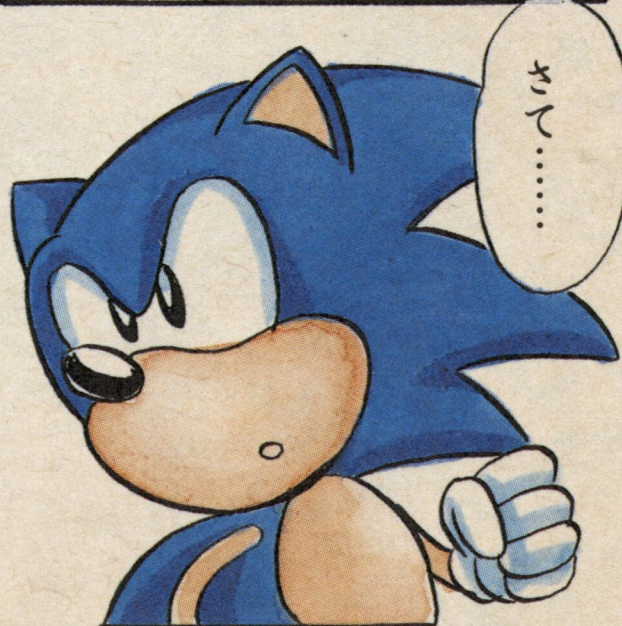
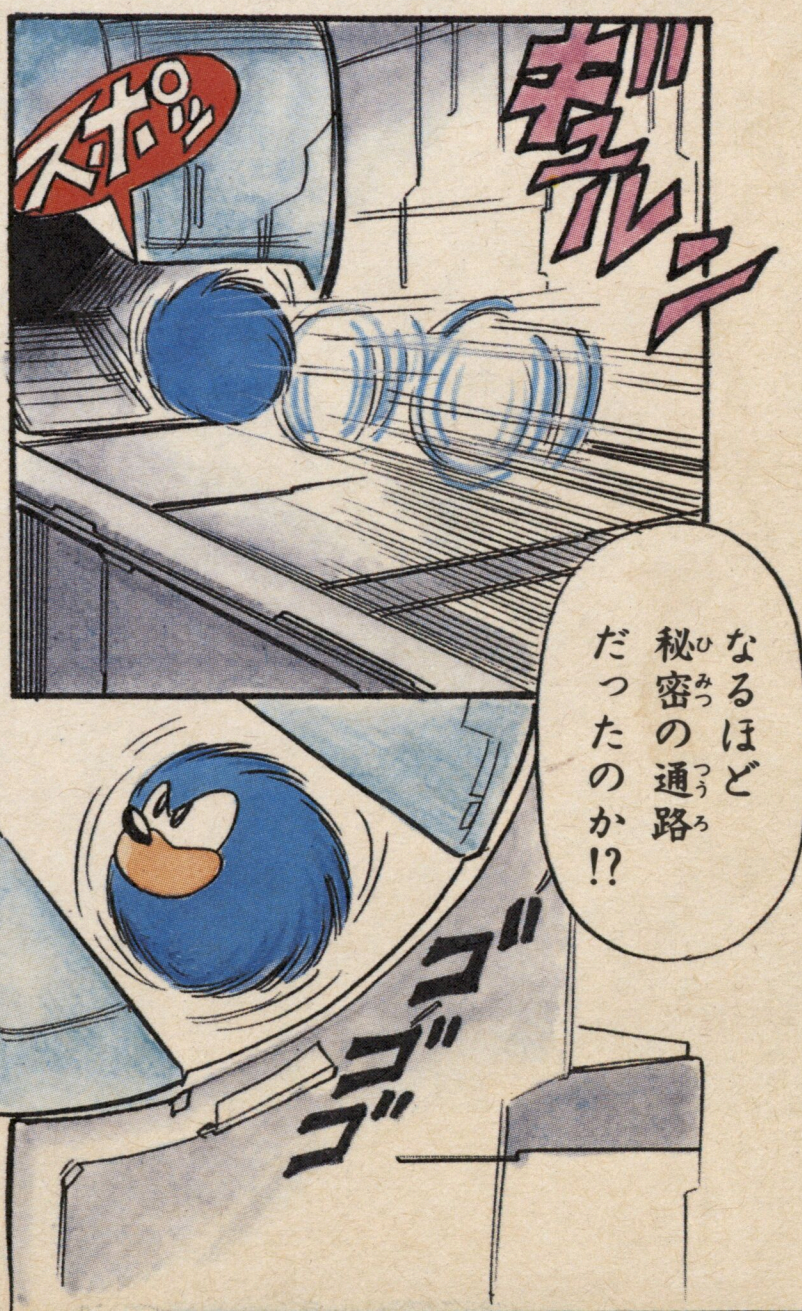
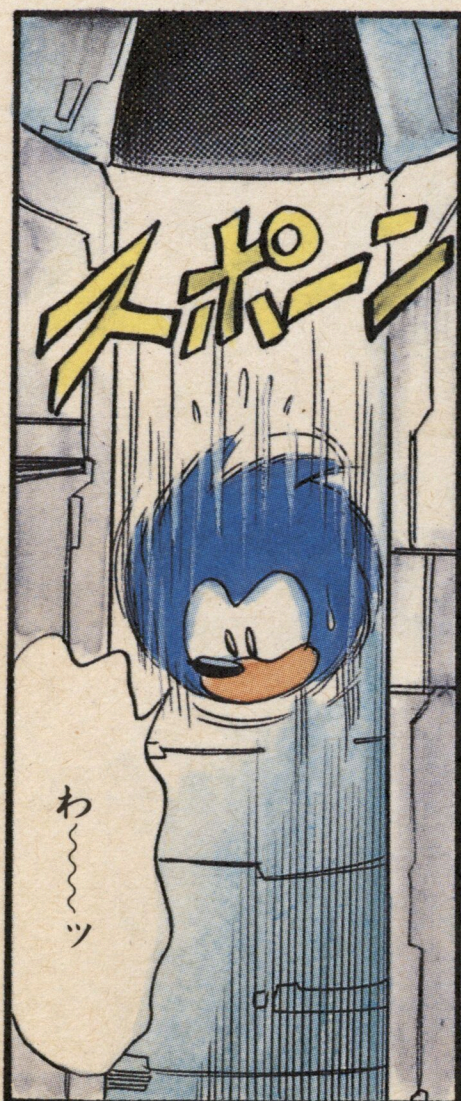
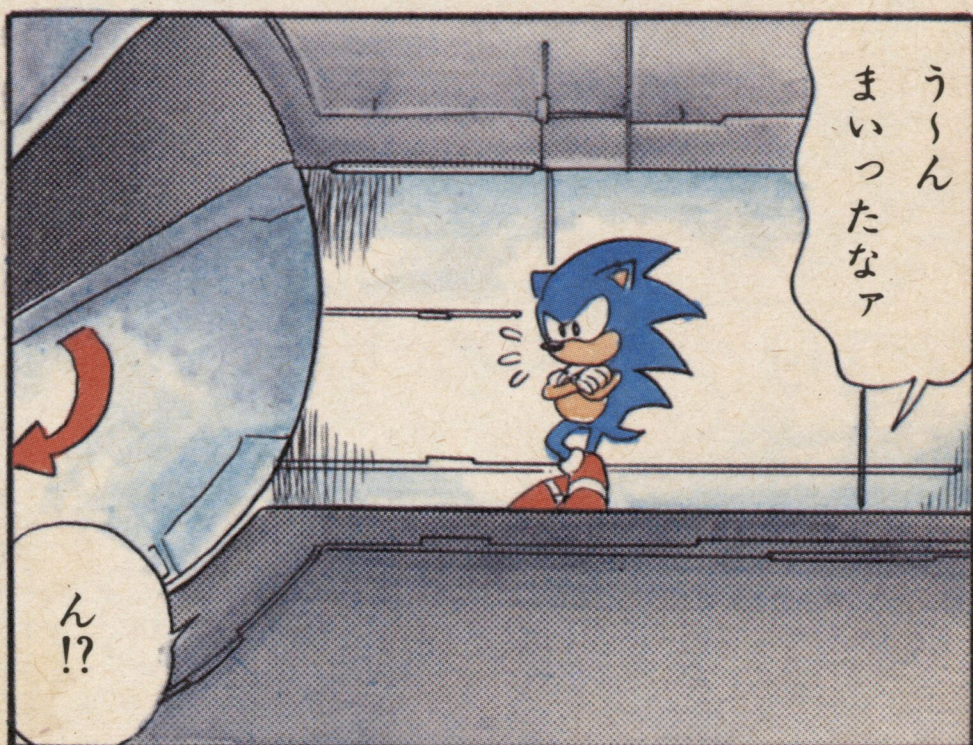
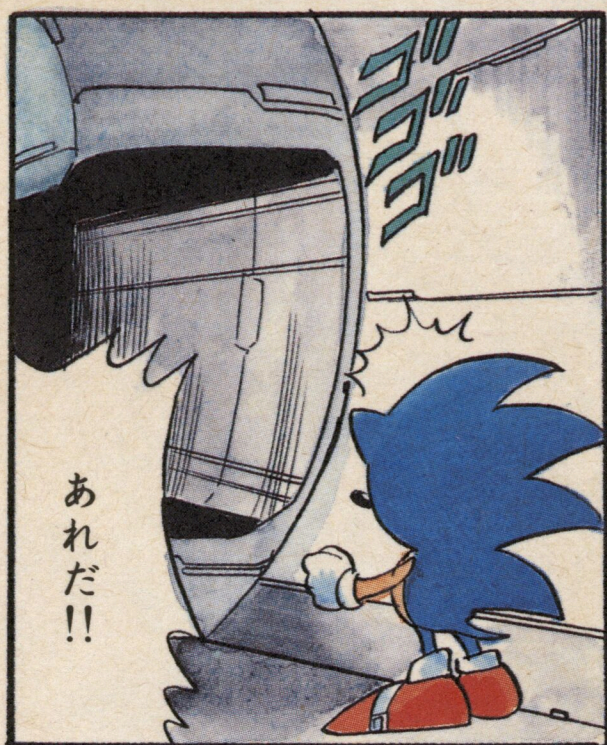
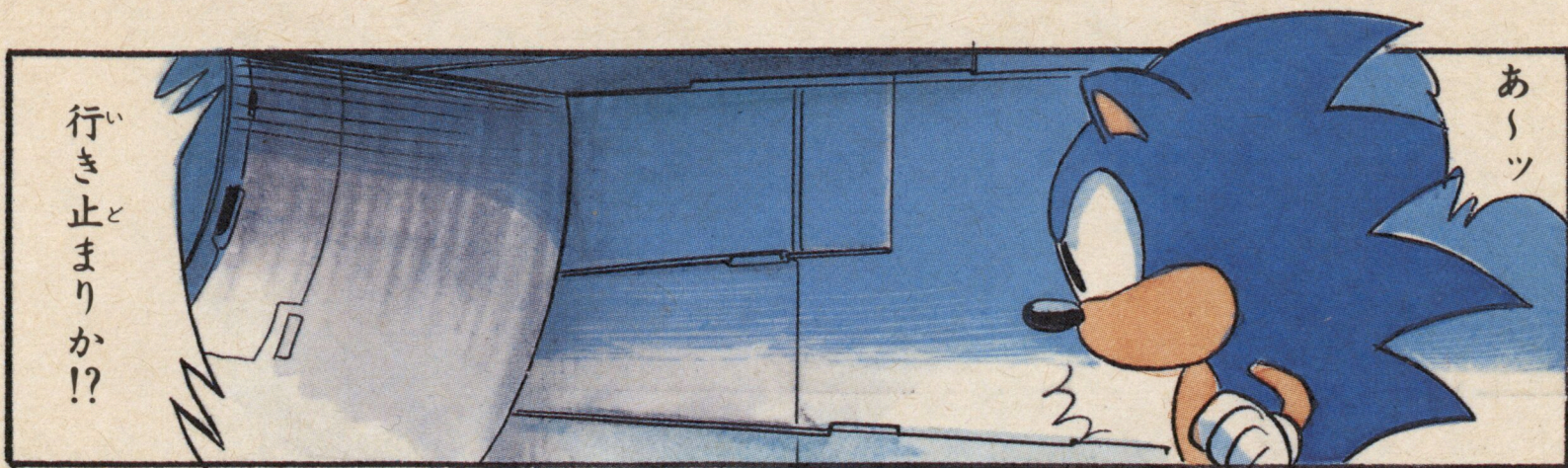
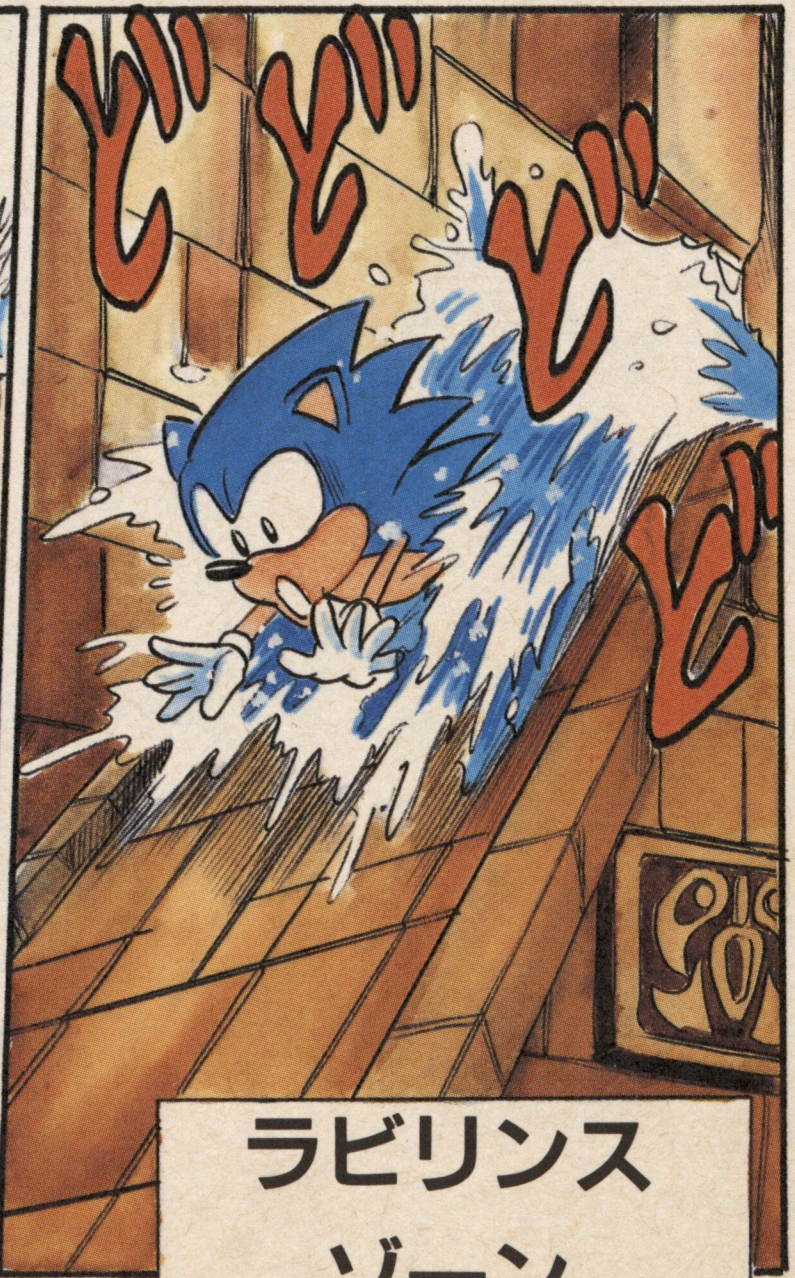
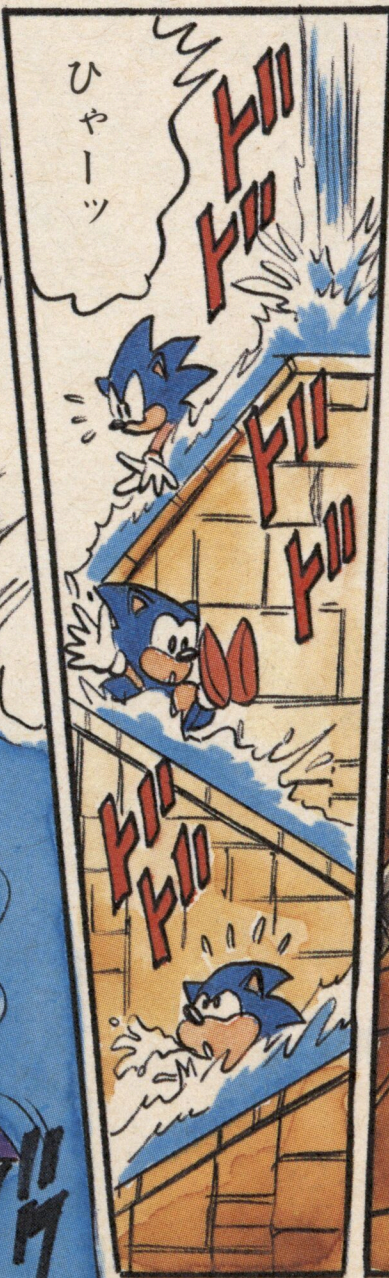
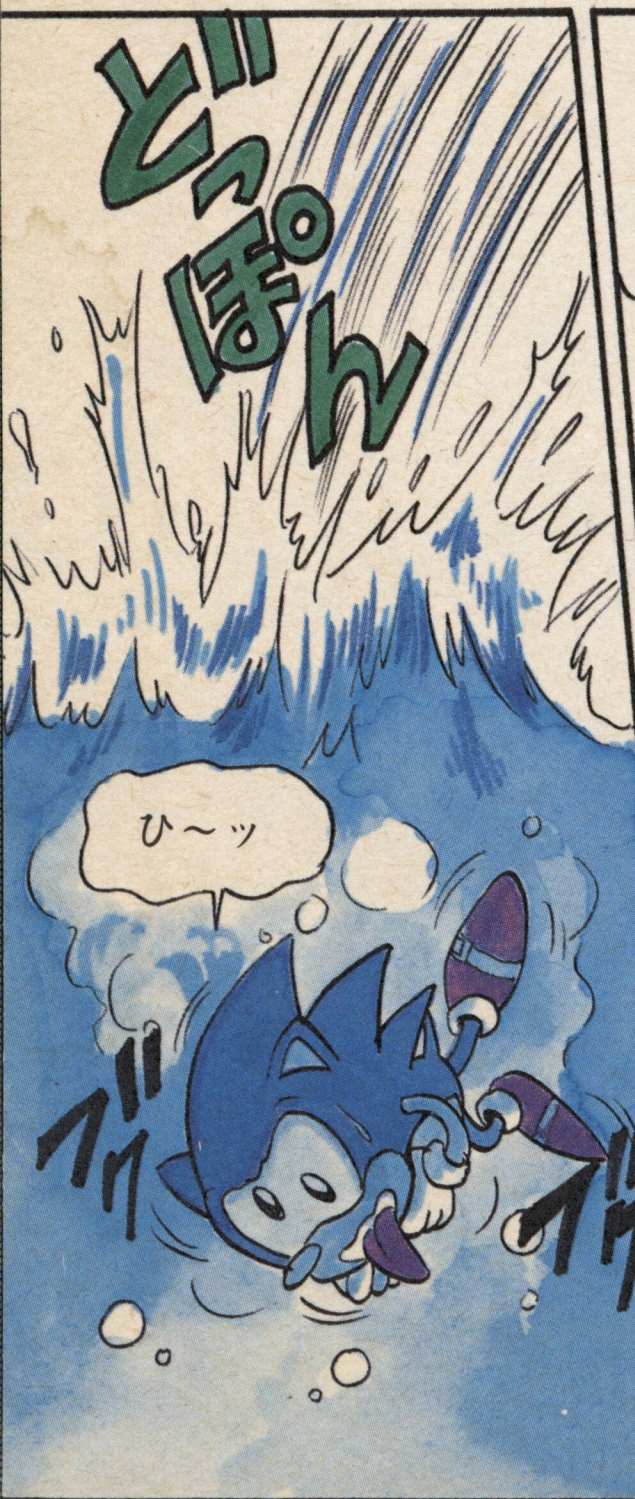
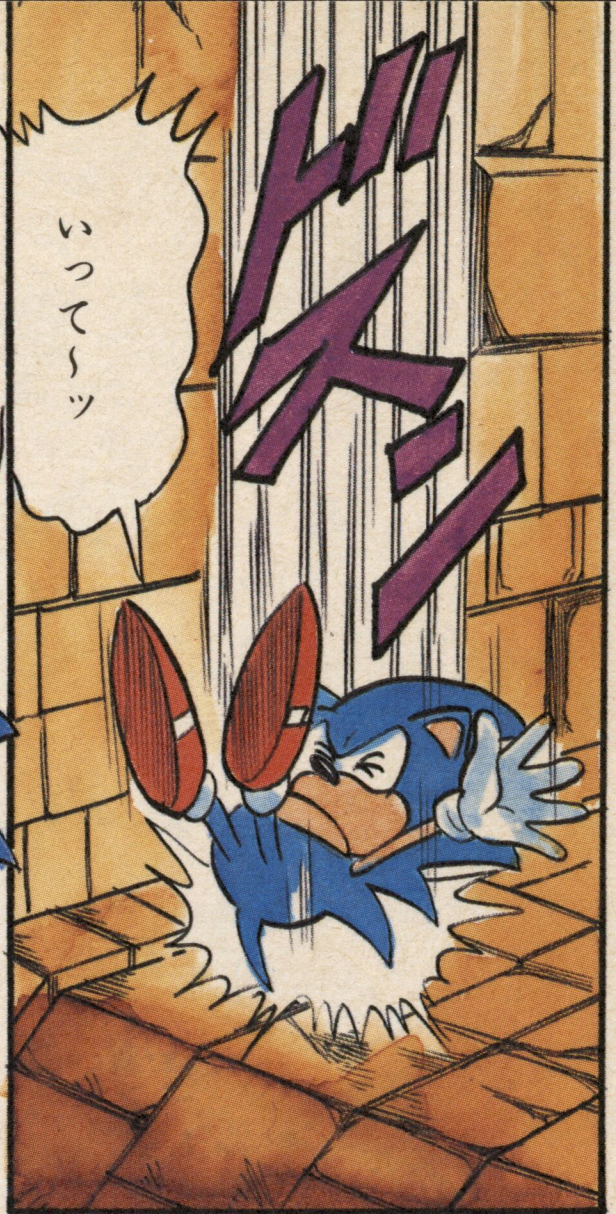
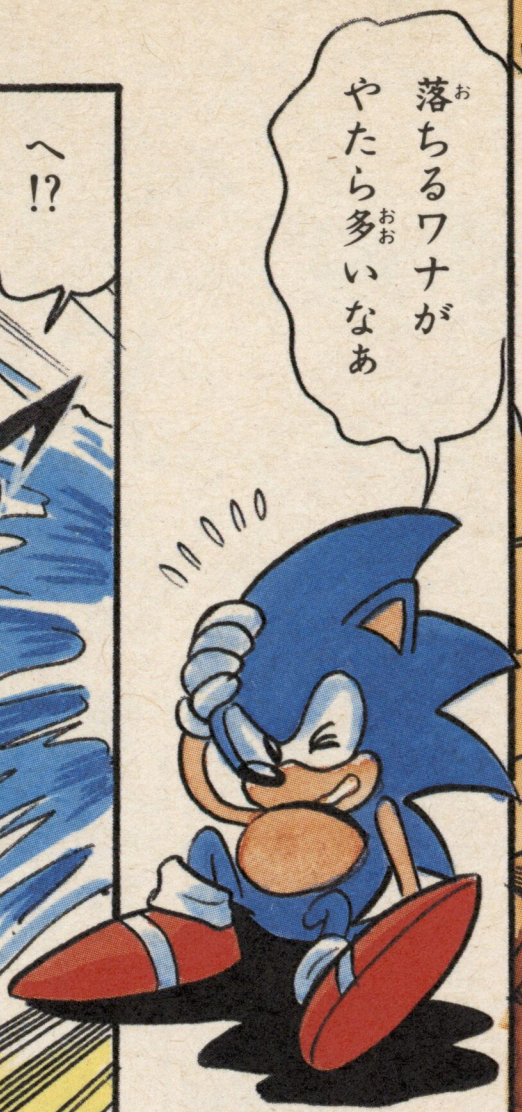
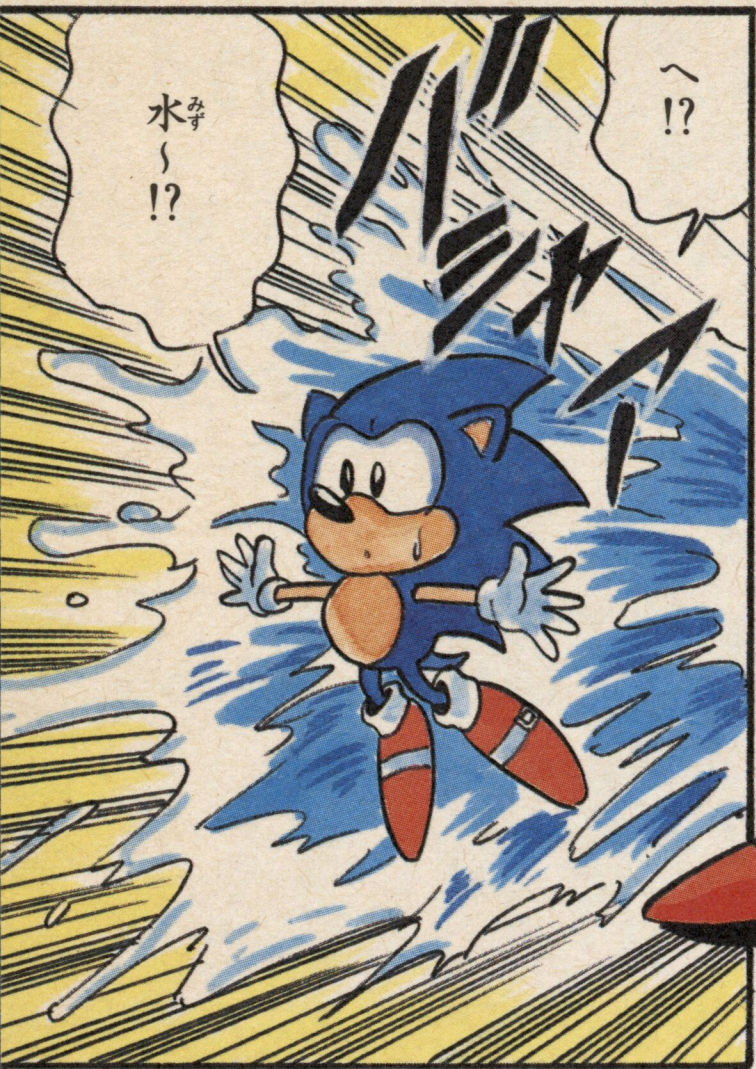
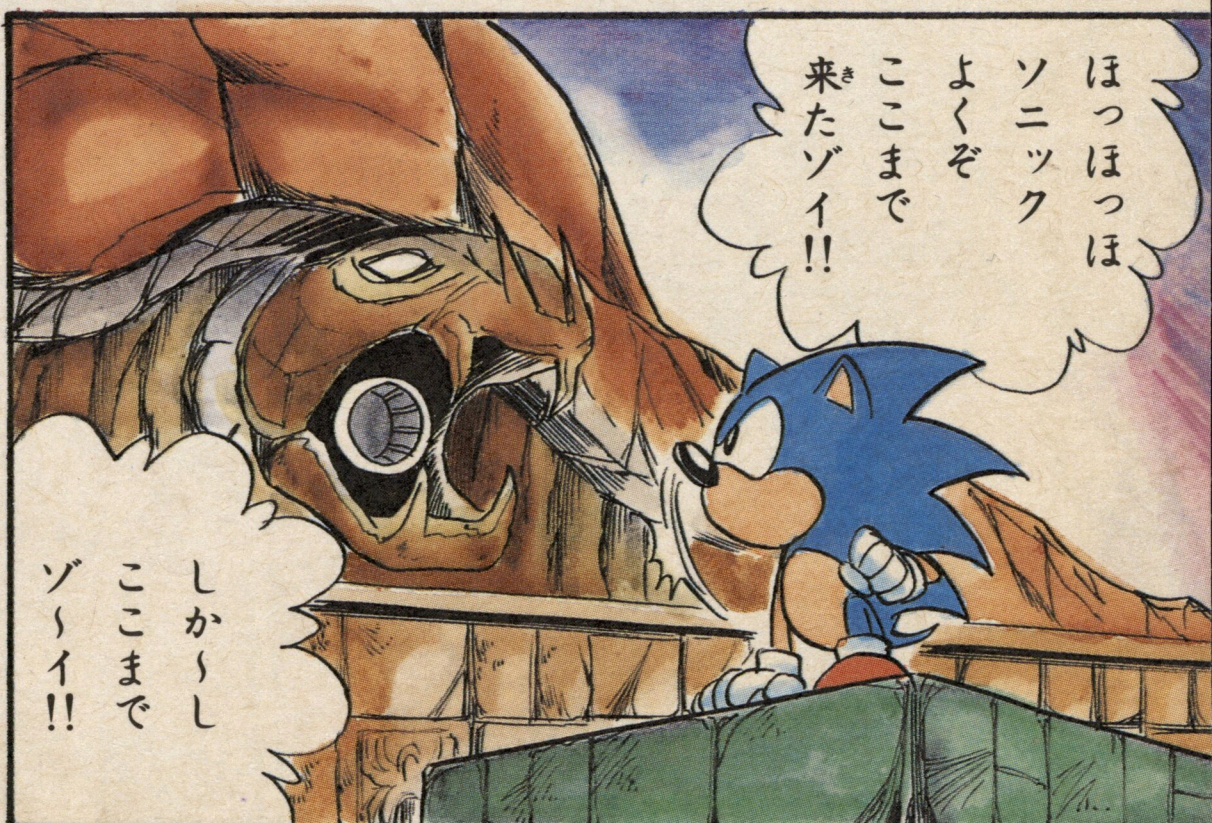
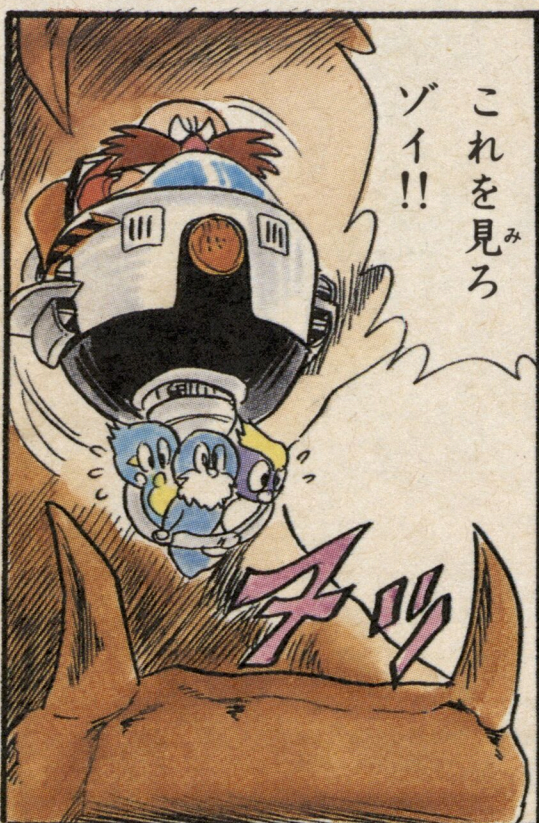
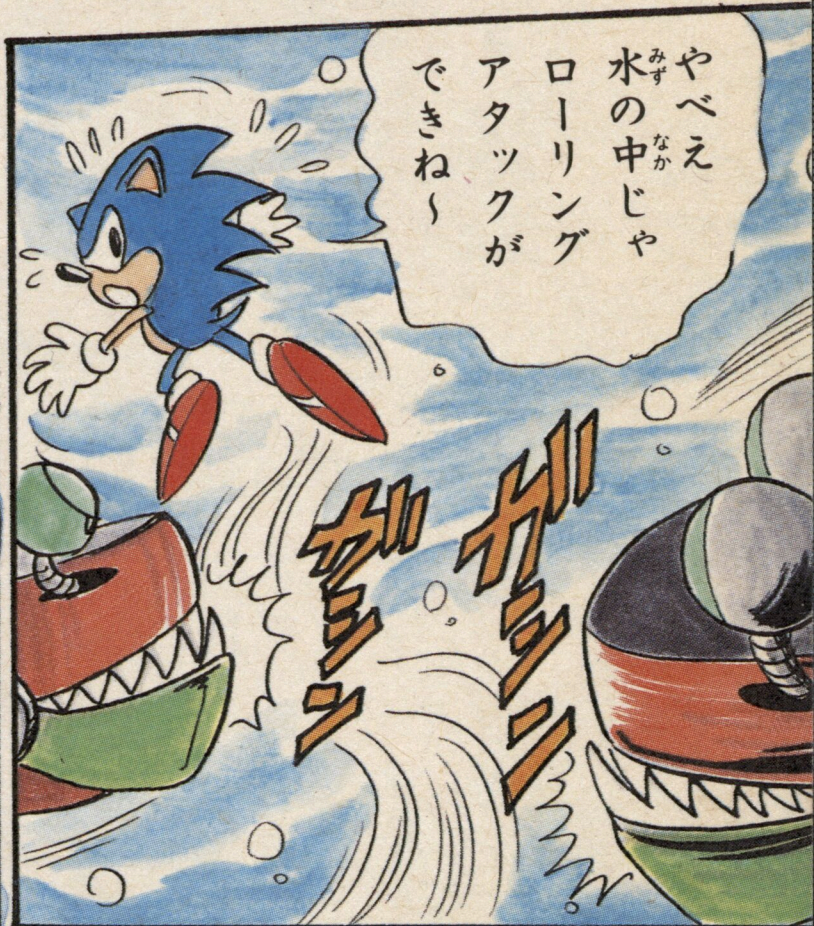
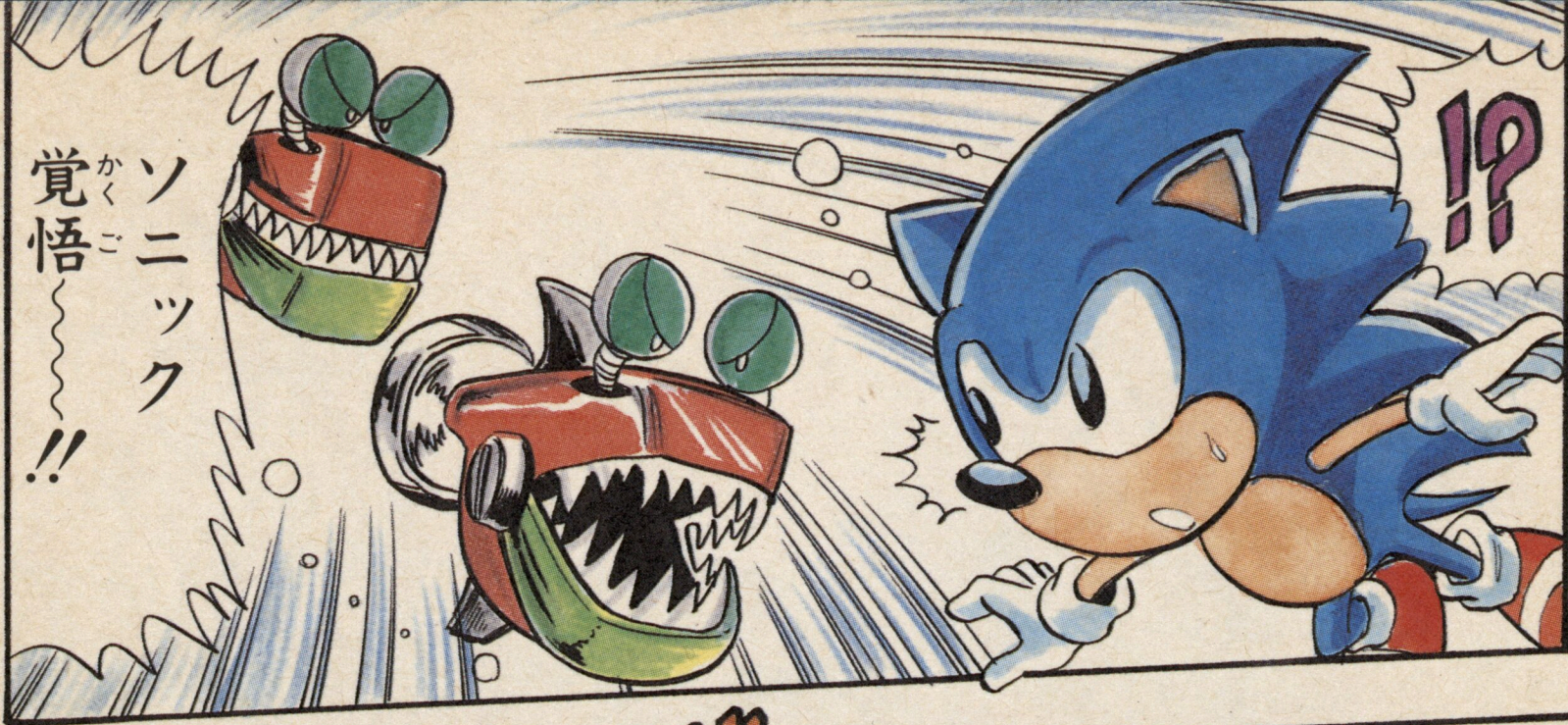
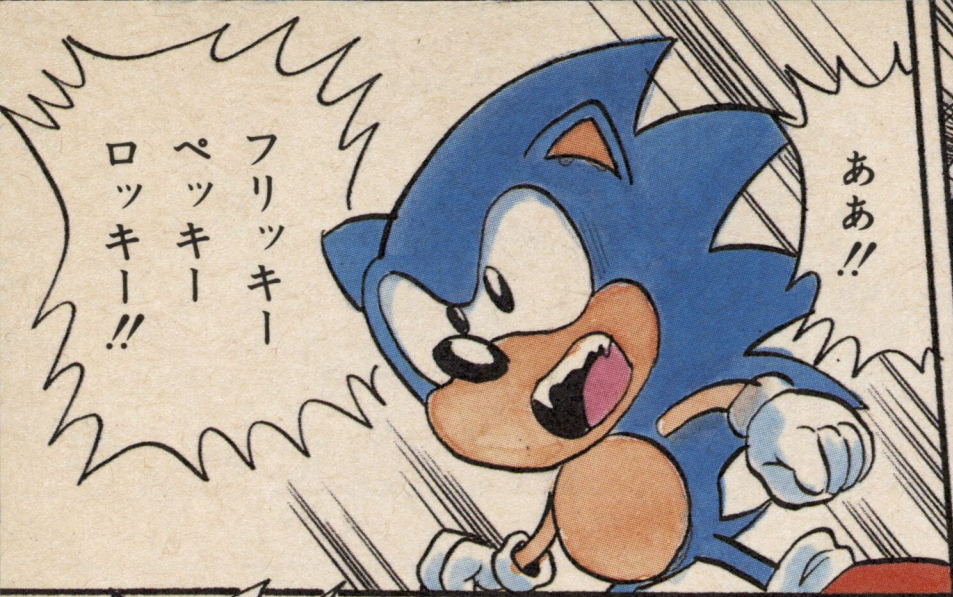
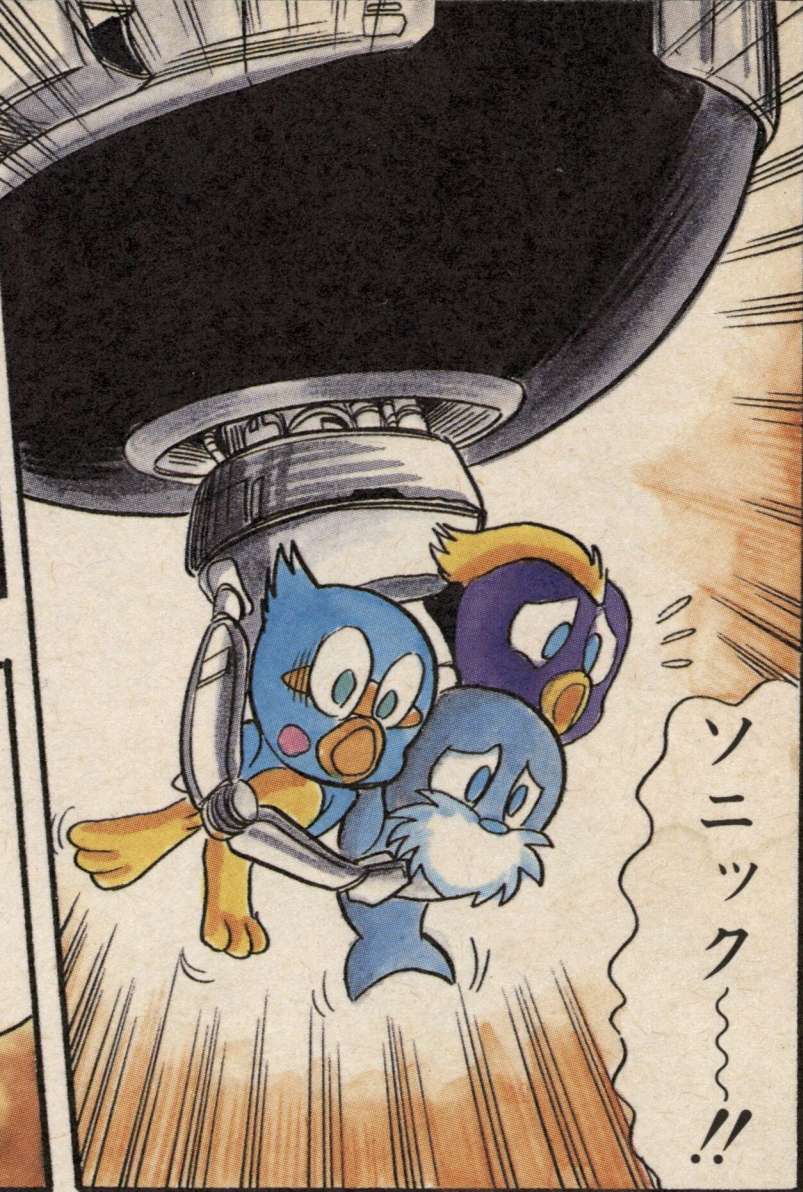
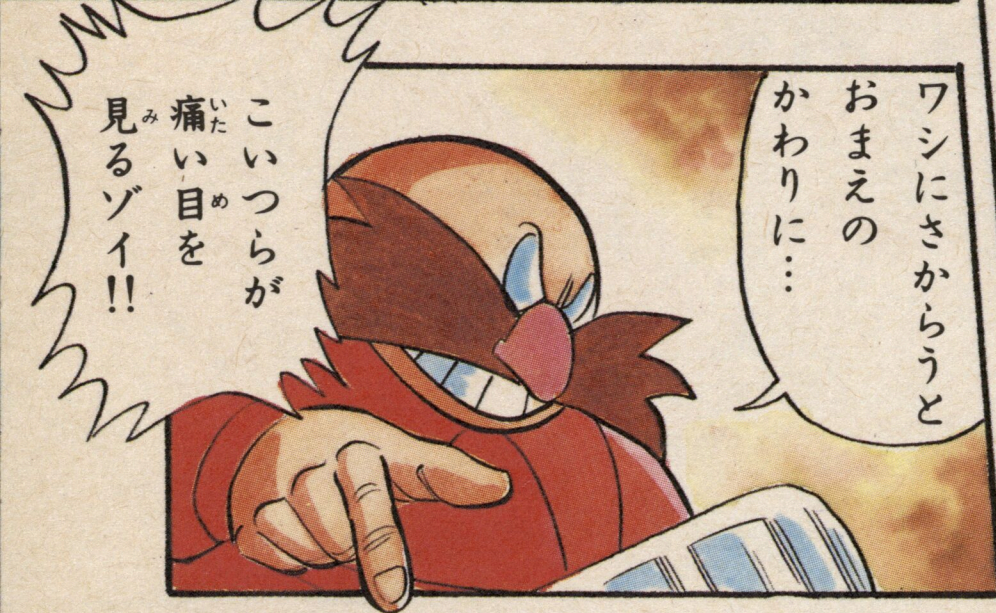
運の
いい奴め
へへ～～
たすかったァ

ほっほっほ
ソニック
よくぞ
ここまで
来たゾイ!!
しか～し
ここまで
ゾ～イ!!

これを見ろ
ゾイ!!

ソニック〜〜!!

ああ!!

フリッキー
ペッキー
ロッキー!!

ワシにさからうと
おまえの
かわりに…

こいつらが
痛い目を
見るゾイ!!

それが
イヤなら
素直に
ぶっとばされろ
ゾイ!!

やれるもんなら
やってみろ!!

よ〜し
にぎり
つぶすゾイ!!

ギリ

ギリ
ギリ

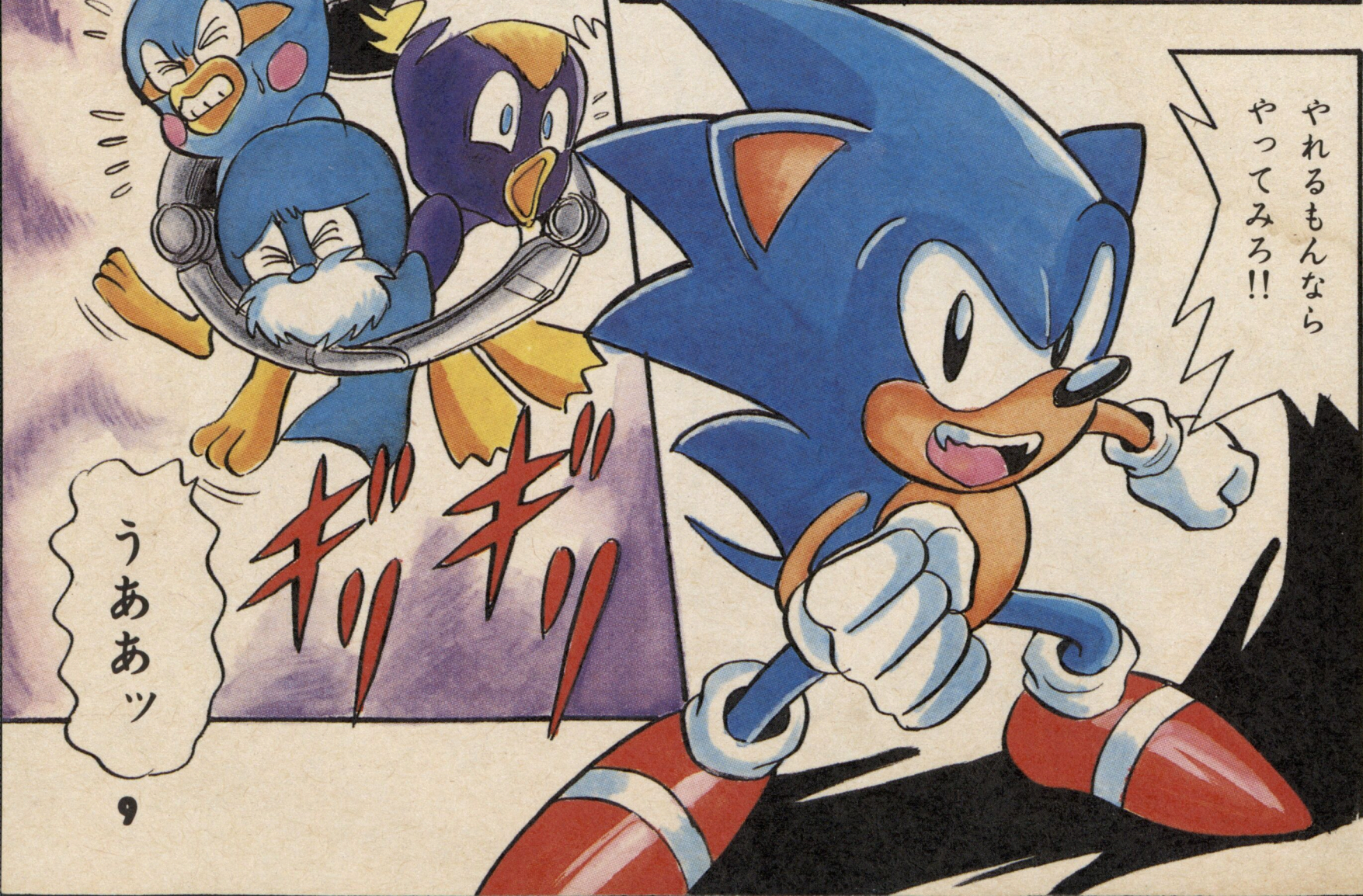
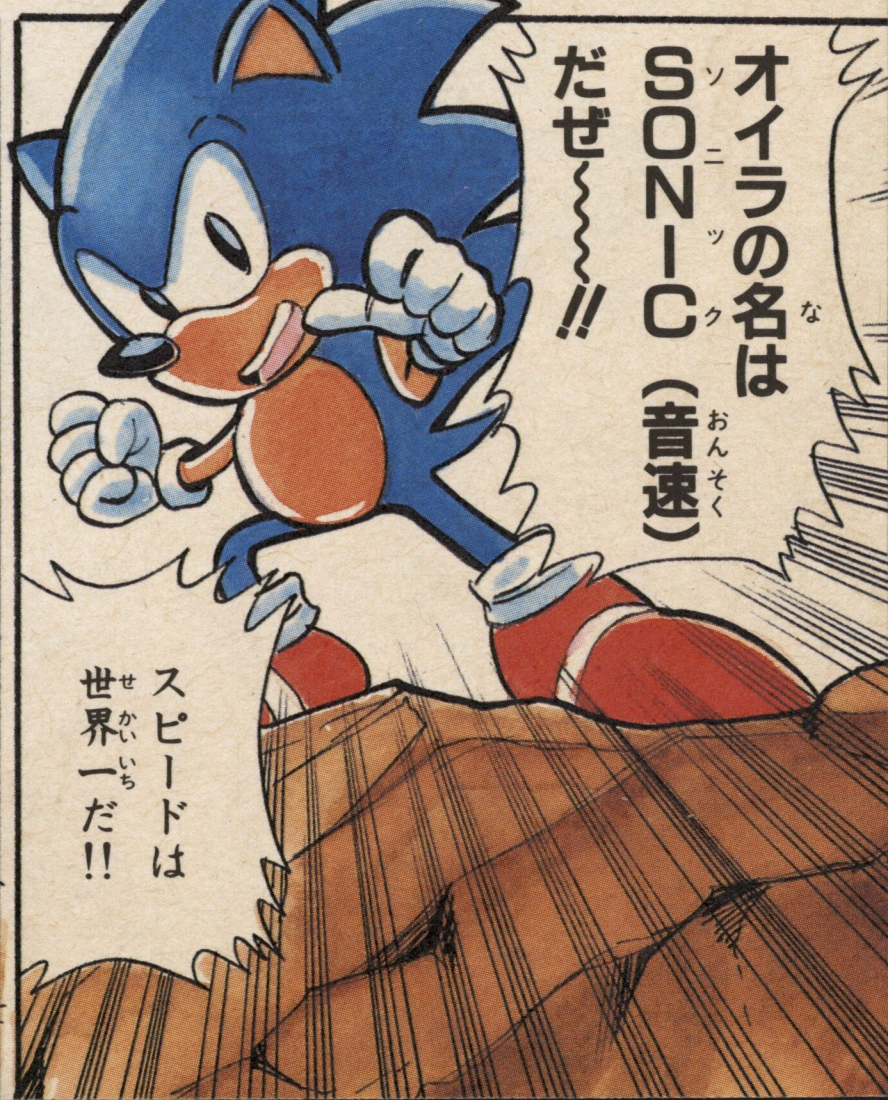
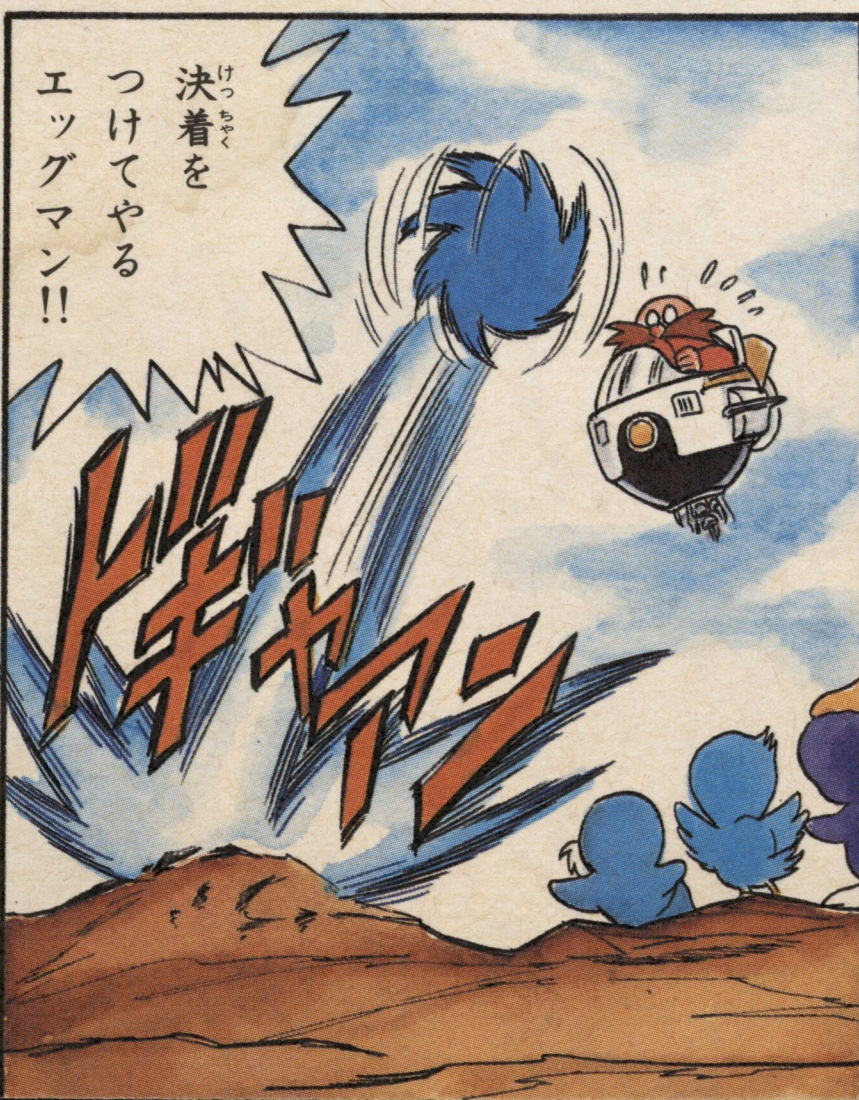
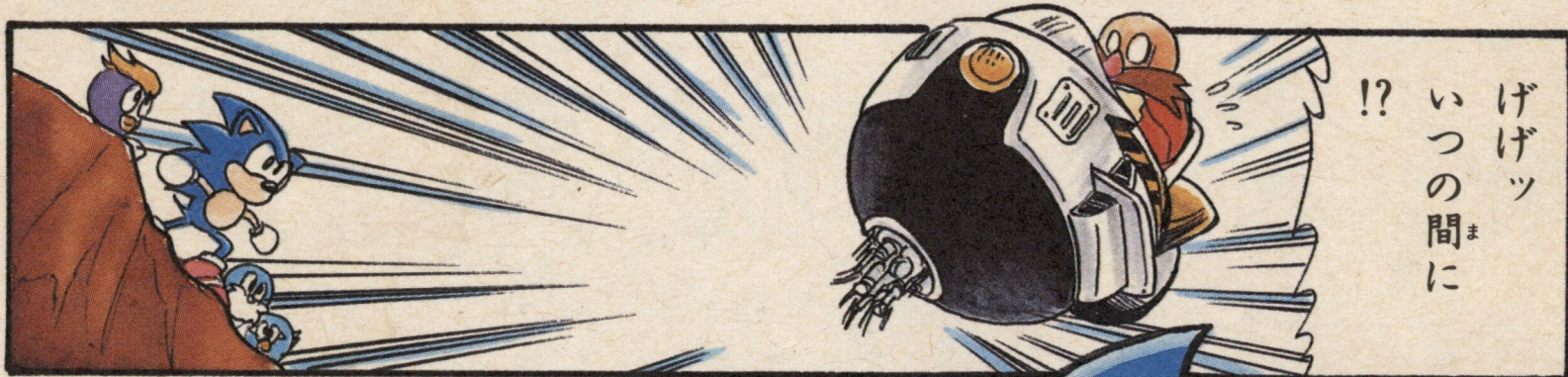
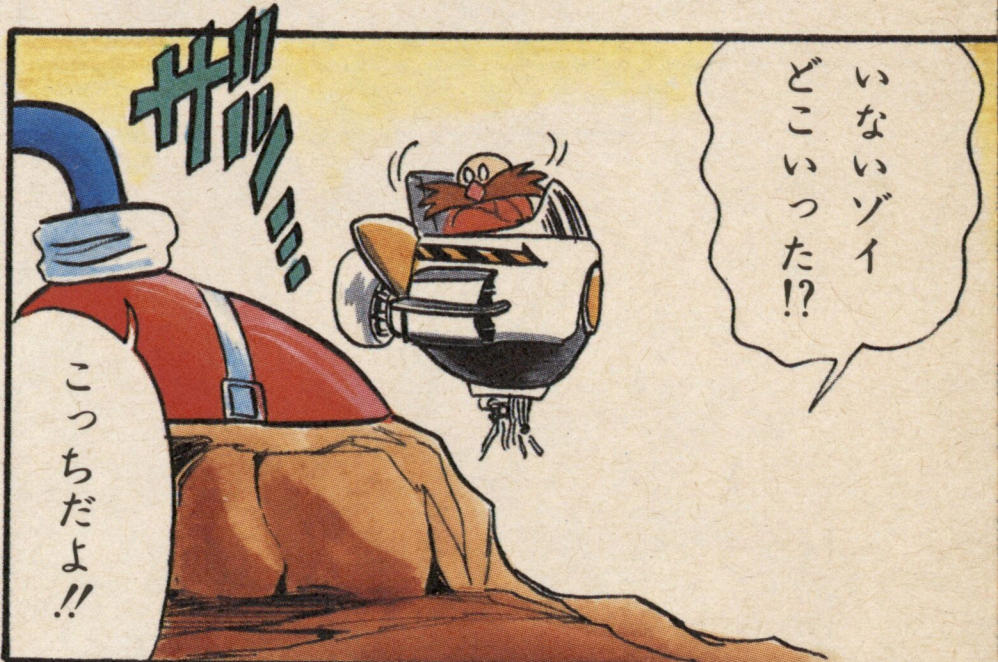
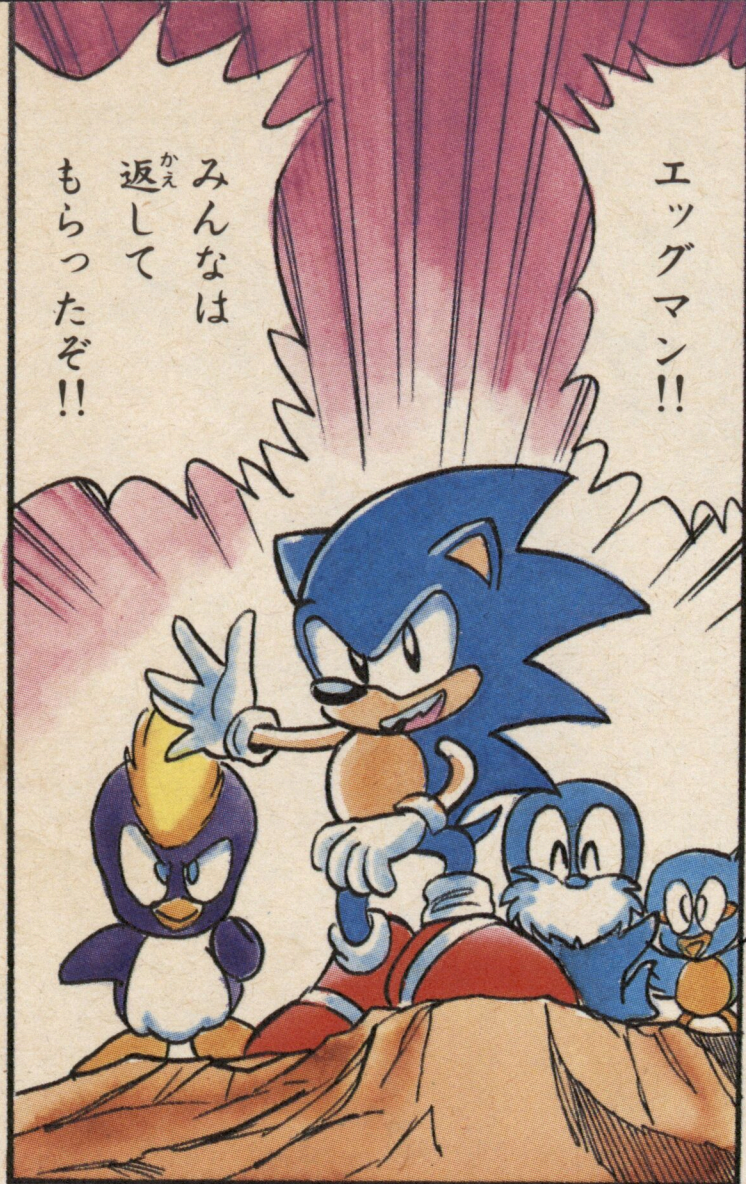
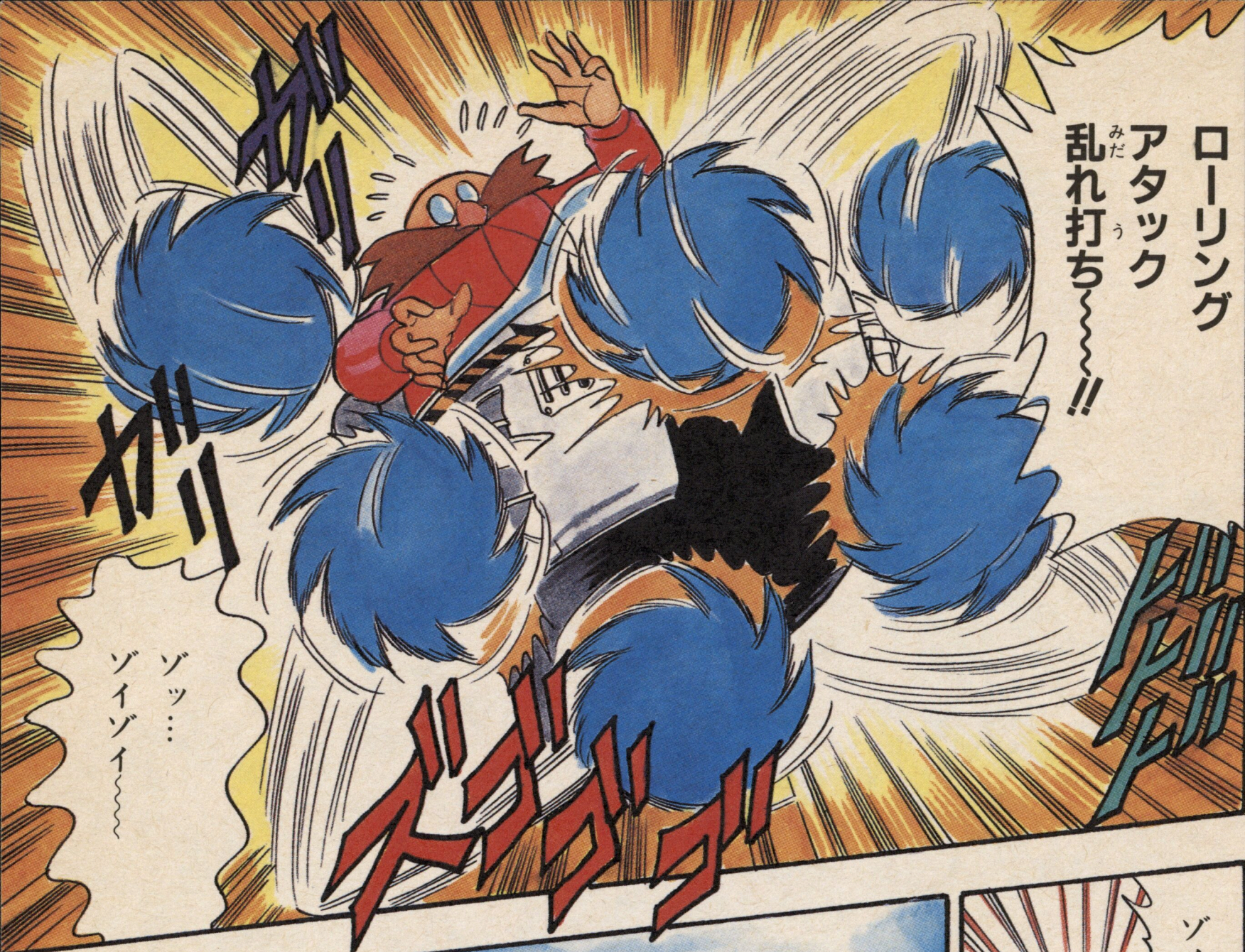
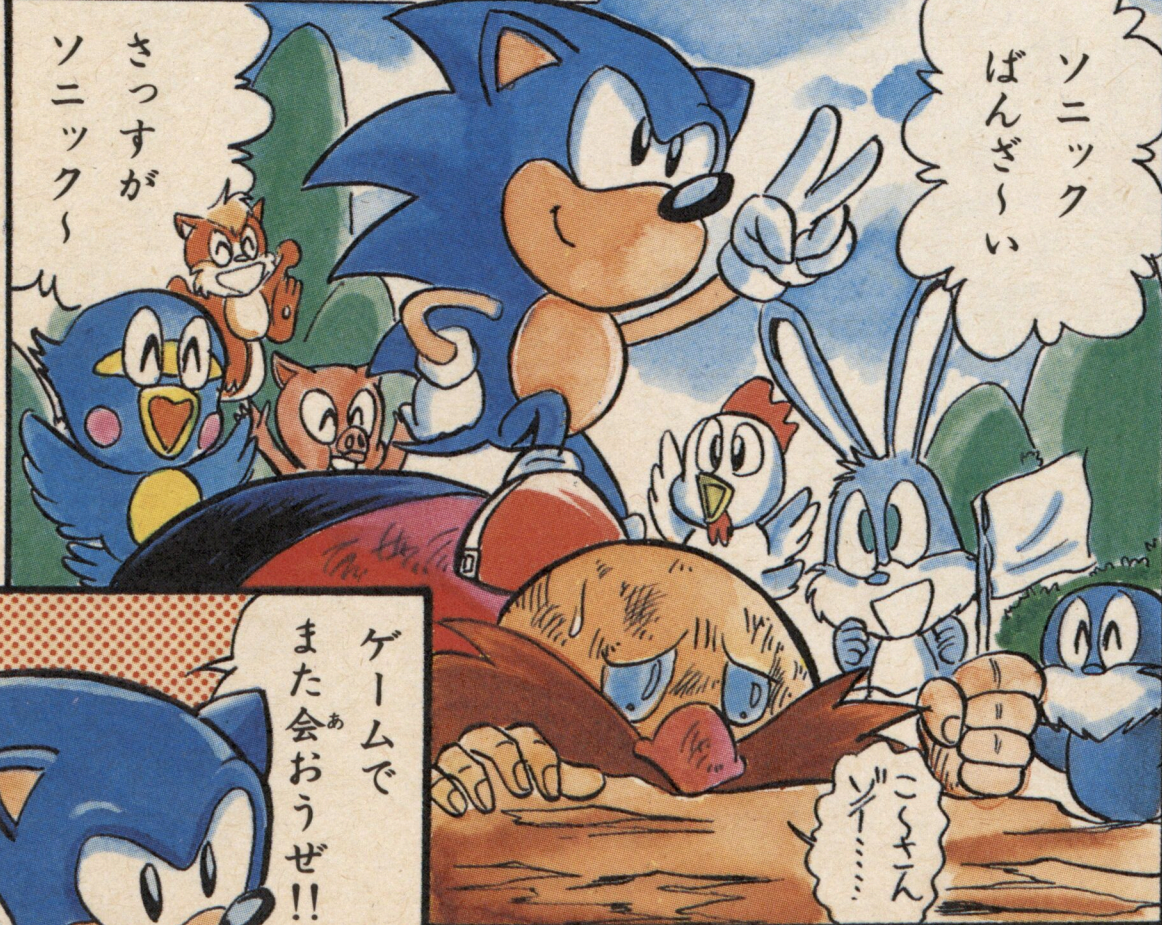
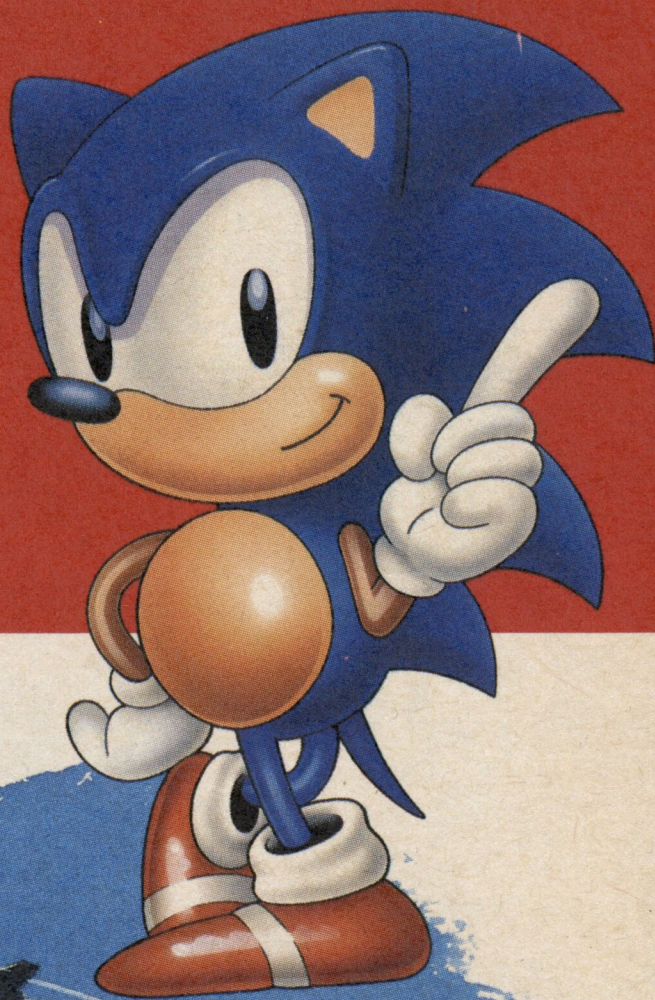
うああッ

ぐはは
どーする
ソニック!?
ん!?
いないゾイ
どこいった!?
こっちだよ!!

エッグマン!!
みんなは
返して
もらったぞ!!

げげッ
いつの間に
!?

オイラの名は
SONIC(音速)
だぜ~~~!!
スピードは
世界一だ!!

決着を
つけてやる
エッグマン!!
ドギャアン

ローリング
アタック
乱れ打ち〜〜〜!!
ガリ
ガリ
ゾッ…
ゾイゾイ〜〜〜
ドドドド
ズゴゴゴ
ゾイ〜〜〜ッ
かくして
サウスアイランドに
再び平和が戻った!!
ソニック
ばんざ〜い
さっすが
ソニック〜
こ〜さん
ゾイ……
ゲームで
また会おうぜ!!

伝説のはじまり

人は2本足歩行を始めた時から、空と未知のスピードへの憧れを持ち始めたと言う。

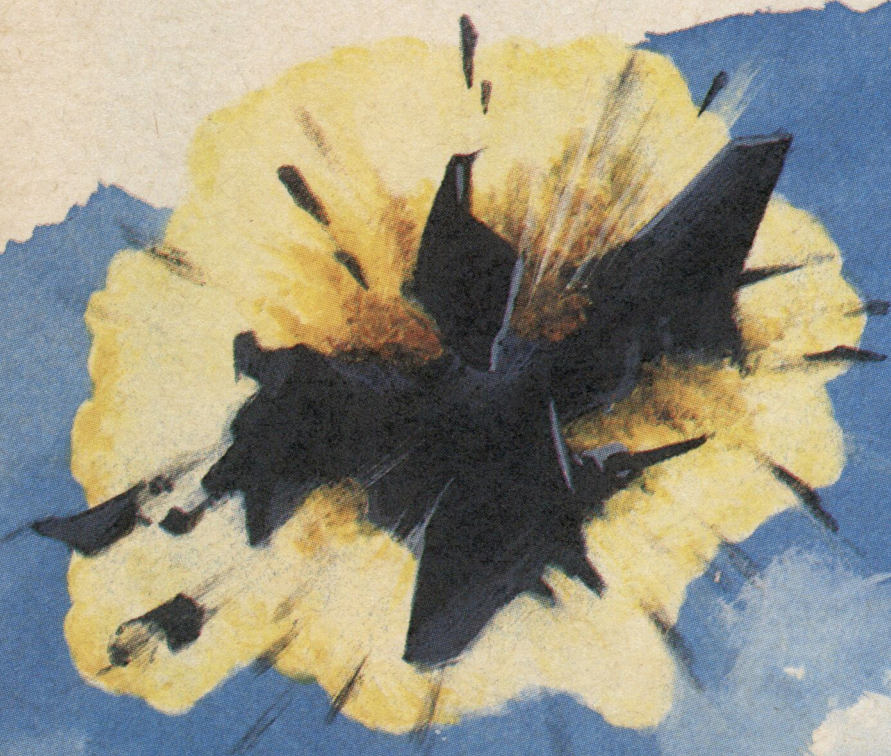
1947年アメリカの空軍には2人のエースパイロットがいた。1人は史実に残る最初に音速の壁を超えた男、チャック・イエガー。そしてもう1人の男は、ヘンリー・ゴードン。彼はその研ぎ澄まされたテクニックからヘッジホッグ（ハリネズミ）と呼ばれていた。

ヘンリーはそのあだ名から、フライトジャケットにハリネズミのエンブレムを付けており、それは彼のトレードマークとなっていた。

ある日、司令部に呼び出されたチャックとヘンリーは新型戦闘機のテストを命じられる。彼らの音速への挑戦が、いよいよ始まる。

伝説となった男

テスト飛行当日、チャックとヘンリーはお互いの健闘を祈り、フライトジャケットの交換を行った。お互いを認め合っている彼らならではのことだ。

アリゾナの空を飛ぶ2機の新型ジェット戦闘機。まず1号機に乗るヘンリーから音速へのチャレンジは始まった。視界の狭まる中、無線による交信を続けるヘンリー。強烈なGを感じながらスロットルをしぼるヘンリー。地上の基地では1号機の速度測定が進む。ドーンという音とともに1号機はついに音速の壁を破った。歓声に湧きたつ地上基地。喜びに絶叫するヘンリー。しかしこの瞬間、ヘンリーの乗る1号機は無残にも爆発。彼の機影は2度とレーダーには映らなかった。その約20分後、2号機に乗るチャックは音速の壁を無事破り、地上に降り立つ。

史実に残ることになったのはチャックの方だった。賞賛の日々が続くチャックにとって、重いシコリは残った。家族にも真実が伝えられぬまま、歴史の陰に追いやられようとしているヘンリーに対し、チャックは申し訳なく思うのだった。

チャックは決意する。ヘンリーのことを生涯忘れまいと。彼はヘンリーのフライトジャケットを着る。そして彼はそのジャケットを「ソニック・ザ・ヘッジホッグ（音速のヘンリー）」と名づける。

新たなる伝説

チャックの着るフライトジャケットを見て、ヘンリーをしのぶパイロットたちは次々と自分のジャケットに『ソニック・ザ・ヘッジホッグ』のエンブレムをつけだす。不思議なことに何故かソニックのエンブレムをつけたパイロットに事故者が出ない。

　やがて、10年の月日が流れる。空軍パイロットにとって憧れのエンブレムとなる『ソニック・ザ・ヘッジホッグ』。だがこの時、ヘンリーを記憶する者は少なく、ヘンリーのことを語る人間は誰もいなかった。

　ある日、チャックは『ソニック・ザ・ヘッジホッグ』のついたフライトジャケットを片手に、ゴードン家を訪れる。そこには成人したヘンリーの娘メグがいた。現在フリーのカメラマンをしていると言う。メグにヘンリーとの思いでを語るチャック、別れ際にフライトジャケットをそっと渡すのであった。

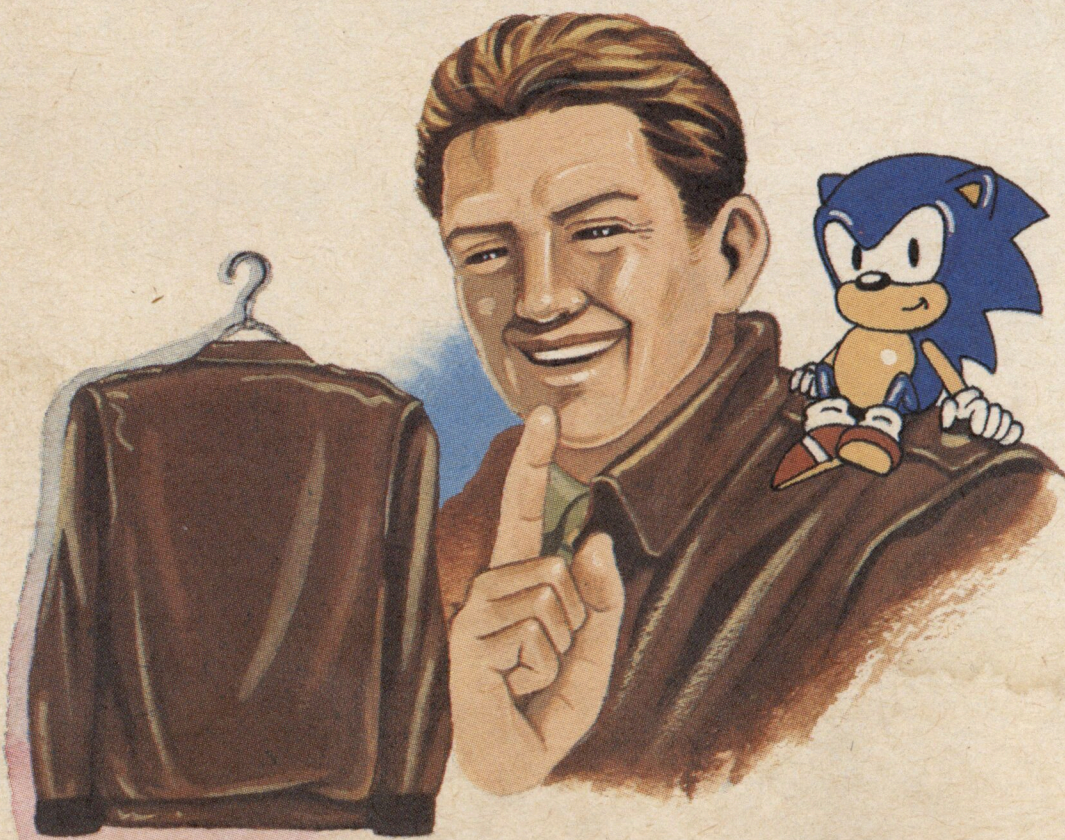
　ソニックのフライトジャケットを着ると何故か落ち着くメグだった。彼女はジャケットを着ると父親に守られているような気持ちになるのだった。

　ある日、メグは航空ショーの取材で、郊外のとある飛行場に行った。勿論ソニックのジャケットを着て。事故はこの時、起こった。

アクロバット飛行する2機が、空中でバランスを崩し、激突。2機のうち1機が記者席に真っ逆さま。逃げ遅れたメグの側に墜落、炎上する。炎に包まれるメグ、逃げようとあがくが、意識は遠のいて行く。

そんな時、誰かがメグの頬を必死に叩くのだった。薄れ行く意識の中で見えたのはソニック・ザ・ヘッジホッグだった。ソニックはニッコリ微笑むと、メグに手招きする。「こっちだメグ。こっちだと。フラフラとソニックの方に歩くメグ。微笑みながら、勇気づけるように手招きするソニック。ソニックの笑顔は優しく魅力的だ。必死にソニックの方に歩くメグ。

だがメグの意識はそこでなくなる。意識の消え際に、ソニックは人指し指をたて左右にふり、彼女に微笑んでいたようだ。そのしぐさは彼女の父親がよくするものだった。

意識が戻った場所は病院のベッドだった。1週間眠り続けたらしい。ソニックのジャケットを探すメグだが、ハンガーにかかっている煤けたジャケットを見てホッとする。看護婦にジャケットをとってもらい、抱きしめる。しかしそこには、ソニックはいなかった。

平成3年9月15日発行（毎月1回15日発行）第3巻第9号（通巻19号）

ソニック・ザ・ヘッジホッグ
ストーリーコミック Vol.3

HEDGEHOG

メガドライブFAN
9月号特別付録